

【表題】九州地方及び一部の四国地方における着氷気象状態が
小型双発機の運航に与える影響の度合いについて【調査報告】

【著者】川上 勝二

【発表】航空大学校研究報告 R-57

【時期】2004年12月

【概要】

小型双発機の計器飛行訓練等に最も影響を与える気象現象には「着氷及び乱気流」がある。宮崎本校では小型双発機を1機保有している。独立行政法人航空大学校運航規程では「着氷及び乱気流」について「並の着氷が予想され、その空域を速やかに通過するか回避できないと予想される場合又は強度の着氷が予想され回避できないと予想されるときはその空域の飛行計画を行ってはならない。飛行中、並以上の着氷状態に遭遇したときはできるだけ速やかに着氷気象状態から脱出するよう努めること。」「強い乱気流が予想されこれを回避できないと予想される場合は、当該空域の飛行計画を行ってはならない。」と定めている。

一般的に「着氷及び乱気流」のうち、着氷の影響が九州地域よりは北日本地域の方が影響が大きいと思われている。しかし飛行の状況や飛行の時期によっては九州地域にも大きく影響しているのではないだろうかと疑問を感じたので九州全域及び一部の四国空域を研究の対象として着氷が計器飛行訓練等にどのように影響しているかを研究してみた。

なお、乱気流については、対象空域において影響がなかったので今回の研究対象から外すこととした。